

## 「メダカの卵を配布する(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

メダカの卵は今回も「田口教育研究所」から取り寄せた。50 個入りを 4 袋で、約 200 個が届いた。特にクール便ではなく、普通のカンガルー便で届き、事務室で検収を受けた後、教室に移動させた。



今回注文したのは「受精後 3～6 日」の混合というタイプで、見た目は卵の中に目が二つ見える状態の卵が多い。子どもたちに渡したあとは、およそ 5 日～1 週間で孵化するだろう。



これがビーカー(500cc)に入れたメダカの卵である。非常に小さいので、200 個あっても大した量にはならない。これを子ども 1 人に 2 個配布するには少し工夫が必要だ。ビーカーの底からスポイトで採ろうとすると、うまく 2 個入らず、必ず失敗する。最悪の場合は、スポイトの先で、卵をつぶしてしまうこともある。卵は、およその人数分、やや大きめのシャーレに移しておいたほうが確実だ。



配布日の中休みには、5 年生の教室は「長蛇の列」になった。私は 2 年前にプラナリアを配布した時のことを思い出した。



プラナリアを配ったのは、この 5 年生が 3 年生だった時で、同じ子どもたちだ。当時の写真を見ると、やはりずいぶん小さい。驚いたことに、あの時のプラナリアの「子孫」をまだ育てているという子どももいた。



メダカの卵の配布は、あらかじめ手紙を出しておいたので、ほとんどの子どもは LG21(乳酸菌飲料の 120cc のペットボトル)を持参していた。あらかじめ 2 時間以上前に水道水を入れておくように指示しておいたので、配布は非常にスムーズだった。